

新蜀

國

寶

大

觀



Brigham Young University

N
7362
S93x
1911

朝鮮

國


廳

大

觀

東京高田忠周謹署





Digitized by the Internet Archive
in 2015

例言

一本書は朝鮮の古美術を紹介せんとする目的にて十三道に存在せるものを、漸次蒐集登載せんとす。而して幸に元宮内府博物館は、數多の朝鮮美術品を蒐集せらるゝあり。故に先づ以上の目的にて同館に乞ひ、特に撮影の許可を得、第一輯には全部之を登載せり。其他は漸次可及的材料を精選し、之を第二輯以下に載すべし。

一可成的歴史的に分類せんとせしも、物品の來歴傳はらず、且つ書史の徵すべきもの尠く、又編者の淺學寡聞は勿論、調査の日淺きが爲め、意の如くならざるもの多し。故に略製作年代に依り順序を定めたり。

一現代の朝鮮人は、古物保存の感念乏しく、箇人として古代より傳へたるものの比較的僅少なり。故に物品蒐集上頗る苦難を感ず。博物館が僅々一二箇年を出でずして、數千點を蒐集せられたるは、美術保存上感謝に堪へざる所なり。本書所載のものは其の一斑に過ぎず。是等以外にも、亦頗る優秀なるもの多きは勿論なり。然れども同時に同種類のを多數に登載せるは、蒐集の方法として當

を得ざるが故に、可成各部類に涉りて登載せり。故に比較的大に優秀ならざるものもなきにあらず。そは時代的比較研究に便ぜんが爲なり。又數の上に於て、繪畫を最も多く採りたるは、繪畫には流派多く、各々趣味を異にせる點あるが爲なり。

一説明は可成的簡明なるを欲し、省略せること多し。又咄嗟の間に筆を採り、調査の時日なき爲め、誤謬なきを保せず。博學の士、教示を賜はらば、後日敬んで訂正すべし。

一本書編輯に當り、元宮内府御苑事務局總長小宮三保松君、全博物館部長末松熊彦君は撮影の許可を與へられたるのみならず、多大の便益を與へられ、全評議員杉原忠吉君は、編輯に關し多くの勞を執られたるは、編者の特に深く謝する所なり。

明治四十三年十二月

編 者 識 す

朝鮮國寶大觀目次

第一圖	百濟朝	佛像	一	第二十六圖	李朝	李上佐筆山水	二六
第二圖	新羅朝	金生書	二	第二十七圖	同	李容齋筆雲龍	二七
第三圖	同	冠飾	三	第二十八圖	同	申潛筆花鳥	二八
第四圖	同	石屏	四	第二十九圖	同	李慶胤筆高士觀月	二九
第五圖	同	土器	五	第三十圖	同	李禎筆山水	三〇
第六圖	同	土器	六	第三十一圖	同	美人彈琴(筆者未詳)	三一
第七圖	高麗朝	柳公權書	七	第三十二圖	同	月潭筆山水	三二
第八圖	同	耳錢	八	第三十三圖	同	申夫人筆蘆雁	三三
第九圖	唐鏡系鏡		九	第三十四圖	同	同	三四
第十圖	女真鏡		一〇	第三十五圖	同	仁獻王后御繡山水	三五
第十一圖	高麗朝	梵鐘	一一	第三十六圖	同	李崇孝筆漁夫	三六
第十二圖	同	廚子	一二	第三十七圖	同	趙涑筆鷄林古事	三七
第十三圖	同	(其二)	一三	第三十八圖	同	洪得龜筆漁翁	三八
第十四圖	同	香爐	一四	第三十九圖	同	曹世傑筆仙人圍棋	三九
第十五圖	同	半鐘	一五	第四十圖	同	金埴筆蘆雁	四〇
第十六圖	同	大花瓶	一六	第四十一圖	同	尹斗緒筆漁樵問答	四一
第十七圖	同	茶碗	一七	第四十二圖	同	崔北筆山水	四二
第十八圖	同	白磁人物置物	一八	第四十三圖	同	金弘道筆鬪犬	四三
第十九圖	同	大缸	一九	第四十四圖	同	李寅文筆山水	四四
第二十圖	同	酒養子	二〇	第四十五圖	同	金厚臣筆秋渚水禽	四五
第二十一圖	同	石棺	二一	第四十六圖	同	申潤福筆婦女彈琴	四六
第二十二圖	同	刺繡	二二	第四十七圖	同	金斗梁筆山水	四七
第二十三圖	李朝	姜希顏筆山水	二三	第四十八圖	同	眞珠添綴團扇	四八
第二十四圖	同	安堅筆山水	二四	第四十九圖	同	眞珠添綴囊	四九
第二十五圖	同	韓脩書	二五	第五十圖	同	鐘	五〇

第一 百濟朝 佛像 (高サ九寸三分五厘)

朝鮮に始めて佛法の入りしは、高句麗小獸林王二年にして、釋迦滅後一千三百餘年、即ち西曆紀元後四百年代にして、佛法の支那に傳はりてより三百餘年の後なり。其の傳ふる所に據れば、後秦主苻堅、沙門須道を遣はして、始めて佛像經文を高句麗に傳ふ云々。又百濟に傳はりしは、枕流王元年にて、其の記に曰く、胡僧摩羅難陀晉より至る、王迎へて之を宮内に致し禮敬し、明年佛寺を漢山に建て、僧を度す云々とあり。又新羅に傳はりしは、法興王の時代にて、三國史記新羅本記同王の一節に曰く、

十五年肇行佛法初訥祇王時沙門墨胡子自高麗至一善郡郡人毛禮於象中作窟室安置於時梁遣使賜衣着香物郡臣不知其香名與其所用遣人賫香編問墨胡子見之稱其名曰曰此焚之則香氣芬馥所以達誠於神聖所謂神聖未有過三寶一曰佛陀二曰達摩三曰僧伽燒之發願則有靈應云云。

朝鮮より更に日本に傳はりしは、欽明天皇の御代、百濟聖明王の時代にして、其の間相隔ること凡二百年なり。蓋し佛法の傳來は、晉に佛法そのものゝみならず、之に伴ふ一般文化は勿論、美術工藝をも輸入し、教義の隆盛と俱に美術工藝も亦隆盛なりき。要するに佛法は、印度及西域を経て支那に入り、希臘式の美術をも輸入し、就中健陀羅、月氏の兩國の如きは、最も歐洲との關係あり。故に歐洲と東洋との美術の連鎖を爲し、支那、朝鮮、日本等に之を傳播せり。

朝鮮にては、新羅朝の製作に係る現存の佛像にして、優秀なるもの數多あり、即ち慶尙北道慶州附近の石窟菴の石佛の如きは、當時の代表的佛像にして、其の様式手法の驚くべきものあり、彼の健陀羅式を明に顯はせり。其他新羅朝の製作物にして、諸所に現存せるもの多し。而して、其の初期即ち統一前に於けるものと、其の後期即ち統一後に於けるものとは、大に異なり、初期のものは後期に比し頗る優秀なるが如し。

而して新羅の初期に於けるものよりも、更に優秀なるは、三國時代の製作なり。然れども、同時代のものと確に認定すべきものは、朝鮮に於ても極めて稀にして、獨り本品は、確に三國時代即ち百濟時代のものとして認定し得べし。其の様式極めて珍奇にして、手足に比し腹部の比較的小なるにも係らず、全體に於て一種獨特の様式を具し、他に比類を見ず。蓋し日本にて所謂推古佛と稱するものゝ、稍髣髴たるを認むるも其の製作の優秀なる、到底是に及ばざるが如し。或は所謂推古佛なるものゝ、此の百濟佛に範を採りしにはあらざるか。要するに朝鮮に於て、熟知せられたる佛像中の最も優秀なるものなりと斷言するも不可なかるべし。



第二 新羅朝 金生書

(縦五寸
横三寸四分)

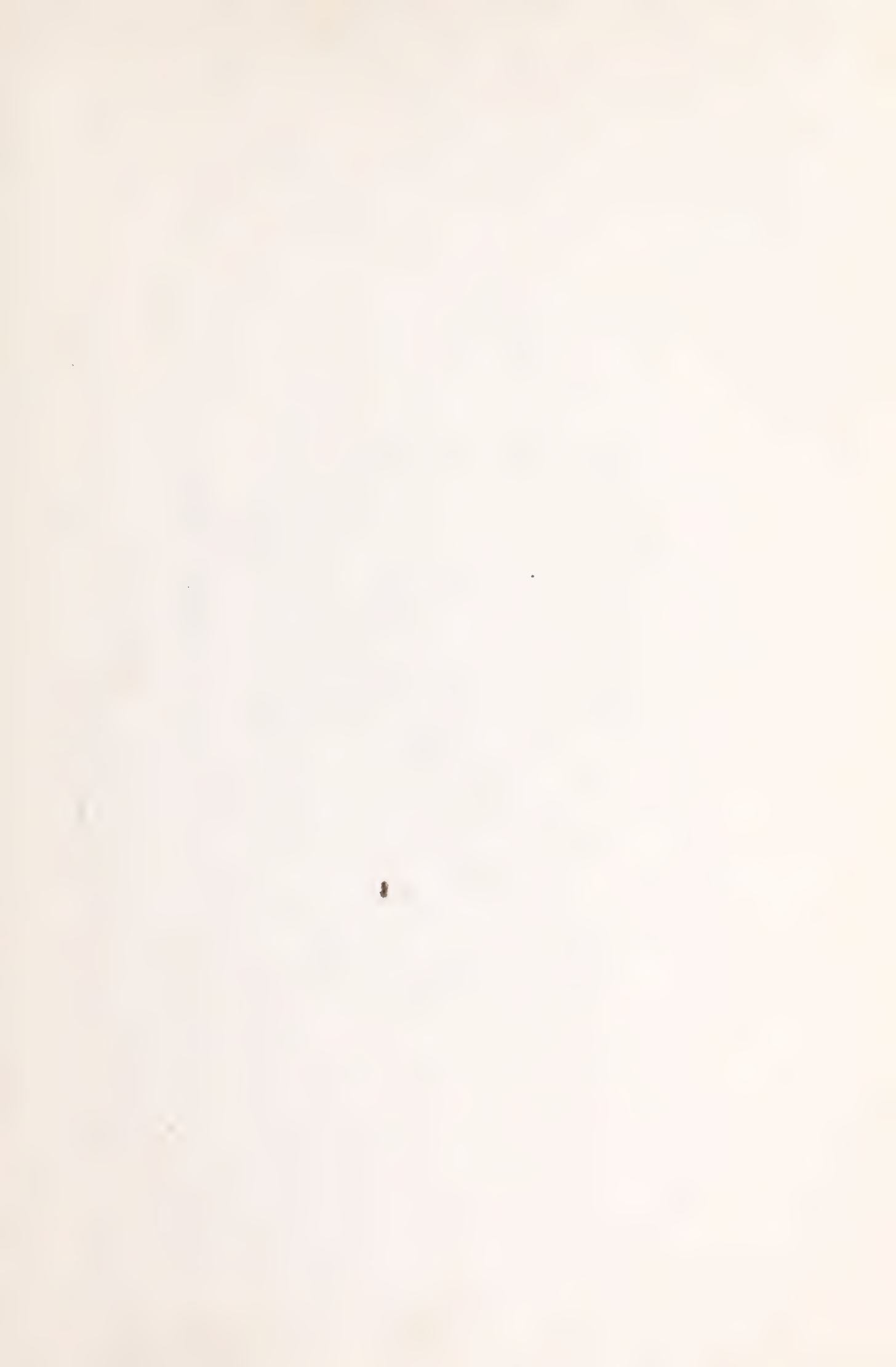
金生は新羅の僧にして、聖德王景雲二年に生る、其の世系を詳にせず。景雲二年は、恰も支那にて最も文明を誇りたる唐の開元元年、即ち玄宗皇帝即位前二年にして、支那に於ける美術の黄金時代とも稱すべき時なり。此の盛時に於て、朝鮮は直接に唐の文化を輸入し、同じく未曾有の隆盛を極めたり。此の時代に於て、金生は天才に加ふるに練磨研鑽を重ね、古今第一の能書家の名を博したり、朝鮮に於て古代よりの能書家は、何人も先づ第一に金生に指を屈せざるものなし。弘法大師も亦略同時代に於て日本に生れ、同じく僧侶にして、古今獨歩の能筆家たり。金生と合せて、日本朝鮮に於ける書聖と稱すべきか。現今金生の書と稱する佛經は、其數頗る多きも、何れが果して眞なるかを知らず。本品は數多きものゝ内、眞筆なるが如し。猶金生の書として有名なるは、慶尙道に白日青雲の碑ありしも、惜むらくは、今無し。今これが小傳を示さんに、國朝人物誌の誌す所左の如し。

金生父母微、不知其世系、生於景雲二年、自幼能書、平生不攻他藝、年踰八十猶操筆不休、隸書行草皆入神、至今往往有眞蹟、學者傳寶之、崇寧中學士洪灌隨進奉使入宋、館於汴京、時翰林待詔楊球、李革奉帝敕至館書圖、洪灌以金生行草一卷示之、二人大駭曰、不圖今日得見王右軍手書、洪灌曰、非是、此乃新羅人金生所書也、二人笑曰、天下除右軍、焉有妙筆如此哉、洪灌屢言之終不信、又有姚克一者、仕侍中兼侍書學士、筆力遒勁、得歐陽率更云、雖及生、亦奇品也。本品は紺紙金泥書にして、經切なり。

可說衆生疑得住無礙勝供養令
佛剎解作來所斷不可說不
七者願不空隨所念衆生令
諸願故八者善巧法不空皆

第三 新羅朝 冠飾

本品は、新羅の古都慶尙北道慶州附近より發掘せられたるものにて、大さ略、圖の如く、總べて純金を以て製作しあり、其の用途は、確に之を知る能はざるも、或は曰く、冠に施せる裝飾品なりと。大なる方の下部に垂下せる形狀は、魚兒牡丹花にて、巧に之を圖案に利用し、且つ上部は、金線を以て唐草紋樣を附しあり。其の製作の絶妙なる驚くに堪へたり。小なるものも亦、細に玩味せば、其の手法、大差なきが如し。何れも、極めて華麗なるものにして、新羅朝の貴公子は、此等のものを裝身具となせしを想はゞ、同時代に於ける風俗の、如何に優美にして高尚なりしかを知るを得べく、同時に美術工藝の大發展ありしを窺知し得べし。





第四 新羅朝 石扉

(縱四尺四寸
横一尺四寸)

朝鮮美術は、由來石彫刻に最も巧にして、就中新羅、高麗兩朝に於て最も然るを認む。新羅朝にては、佛像は、彼の慶州附近石窟菴石佛の如き、又同地佛國寺白雲、青雲の兩石橋の如き、或は慶州武烈王石碑の如き、驚くべき精緻なるものあり。又高麗朝にても開城に於ける恭愍王墓裝飾彫刻の如きものあり、且つ他の美術工藝は、李朝に及んで殆ど見るべきもの稀なるにも關らず、京城に於ける廢圓覺寺石塔の如き東洋無比の優物存するあり。要するに、上古よりして、石彫刻には最も精巧なるもの多し。これ全く、彫刻に適應せる石材の豊富なると、趣味の發達せしとに依ることは勿論なれども、上古に於て、家屋等に盛に之を使用し、且其の需用に應ぜんが爲め、或は支那より名工を聘し、或は研究せるの結果たらずんばある可からず。本品は慶州西岳里古墳の戸扉にして、表裏共に四天王を彫刻し、其の刀法の雄健なる、稀に見る所にして、以て新羅朝に於ける石彫刻發展の一斑を知るを得べし。





第五 新羅朝 土器

(高サ五寸三分
經五寸五分)

吸壺は、日本にては、稀に古墳より發掘せられ、帝國大學、伊勢の徵古館等に之を藏す。然れども、朝鮮にては、未だ他に發掘せられたるを聞かず。本品は、近來南方に於て發掘せられたるものなり。太古にては、日本と朝鮮は、盛に親密なる交際を爲し、政治的關係は勿論、美術工藝に於ても亦、密接なる關係ありしが如し。日本に於ける正史の傳ふる所に據るも、上古既に朝鮮より製陶の法を傳へたり。現に九州地方より發掘せる土器と、朝鮮南部より發掘せるものと、略同一なるものり。本品の意匠及手法も、亦前記帝國大學及徵古館に所藏せるものと同一なるを認め得べし。本品は實に上古に於ける日本及朝鮮の歴史的關係の一斑を語る好個の證左にして、考古學上頗る有益なる材料たり。上古に於ける本品の用途は、確に之を知る能はざるも、酒或は其他の飲料品を入れ、中央部にある小口に管を入れ、而して内部の液體を吸用せしものゝ如し。本品の製作年代は、之を確言し能はざるも、要するに新羅以前に屬することは推知し得べきにより、今假りに新羅とせり。



第六 新羅朝 土器

(右高サ七寸六分五厘
左高サ六寸九分)

新羅朝にては、金屬製作物の頗る壯大にして、而も精巧なる者あり。彼の有名なる慶州鐘閣にある梵鐘の如き是なり。又、石屬彫刻品としては、同じく、慶州附近石窟菴の石佛あり。是等のものは、何れも、當時の代表的製作物として見るべきものあり。然るに陶器に至りては、寂々寥々として、更に是等に比すべきものなきのみならず、未だ陶釉を知らざるものゝ如し。只だ僅に、古墳中より發掘せる土器あるも、多くは無紋のものにして、組織的の紋樣を有するもの極めて稀なり。然るに本品は、輒近慶州附近西岳古墳より發掘せられたるものにして、比較的優秀なる組織的の紋樣あり。新羅朝土器中、稀に見る優物たり。而して其の紋樣は、一種の特色を帶び、純然たる朝鮮的趣味にあらず。又純然たる支那的趣向にも非ざるが如し。想ふに、此の製作せられたる時代は、支那六朝及唐より盛に文化を輸入したるの時代なるが故に、支那西域等を経て、所謂希臘式の輸入せられたるにはあらざるか。佛像に所謂健陀羅式のあると同時に、模様及圖案も、亦同時に朝鮮にも亦輸入せられたるものと思惟し得べし。



第七 高麗朝 柳公權の書

(縦六寸 横五寸六分)

柳公權字正平と稱す。其の略傳に曰く、少好學工草隸官政堂文學謚文管とあり。政堂文學なる名は、現今の官制に於ける内閣の一員にして、即ち大臣なり。高麗朝の功臣にして、而も其の書は、全朝一流の大家たり。朝鮮にては、書名を以て顯はれ、却て高麗朝に盡せし功勞は沒却せるが如し。以て如何に書名の高きかを知るべし。氏は元來朝鮮人にあらず、支那の人にして、高麗朝に歸化し、努むる所ありしと云ふ説あり。されど未だその然否を知らず。高麗史所載の傳左の如し。

柳公權字正平儒州人六世祖大丞車達佐太祖爲功臣公權少好學工草隸登第調翼陽府錄事明宗初直史館累遷兵部郎中後以禮賓卿如金賀萬春節金人稱其知禮轉右副承旨陞右散騎常侍知奏事啓事稱旨多裨益進同知樞密院事二十五年以疾乞退王愛其文學不欲去乃曰朝廷有舊德社稷之福卿何退之遽公權三上章從之居一年疾病親屬進藥公權曰死生有命却不飲疾革王特拜政堂文學參知政事卒年六十五謚文簡性公廉居官不懈子澤彥琛產琛同知樞密院事

本品は、紺紙金泥書きにして、經文の斷片たり。

地藏菩薩本願經地獄名

品第五

爾時普賢菩薩摩訶薩白

龍八部及大衆現在一切

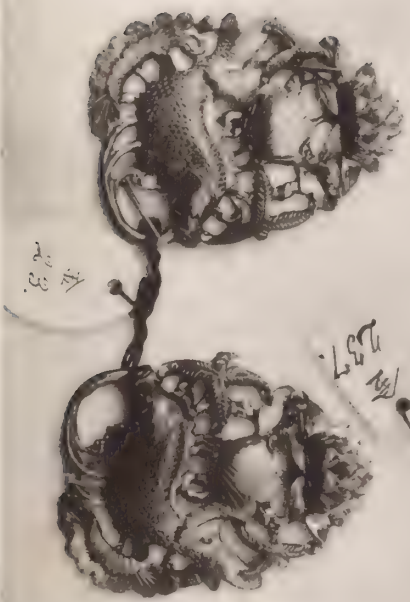
地藏菩薩言仁者願為我

衆生說娑婆世界及閻浮

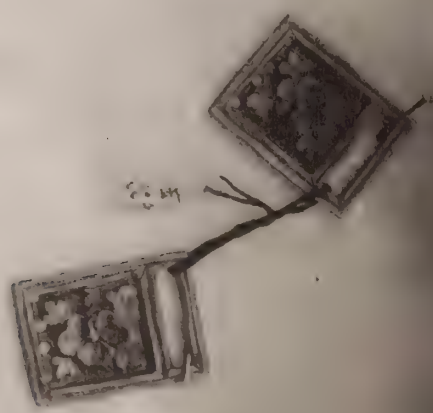


第八 高麗朝 耳錢 蓮二鯉魚 (長サ一寸三分 幅九分五厘)

耳錢は、高麗時代に於ける、冠に附屬せる一種の裝飾品にして、共に發掘品なり。其の大きさは略ぼ圖に示すが如し。地金は總て純金を以て製作す。圖中中央にある佛像彫刻品の如きは、其の製作の巧妙なる、驚くべきものあり。又下部にある二個は、蓮水草及び鯉魚を以て、圖案の材料とせり。其の構想の巧なる、今人をして後に瞠若たらしむ。其の製作の時代は、實に今を距る約五百年以上千年に及ぶ。古昔に於て、斯の如き絶妙なる技能を有せしかを想はゞ、高麗朝に於ける、美術の如何に發展せしかを想像し得べく、又同時に、高麗朝の風俗の如何に奢侈にして、優美なりしかを、窺知するに足らん。



133



134



第九 唐鏡系鏡

(徑九寸八分五厘
厚サ二分五厘)

鏡は、元と必要缺く可からざるものにて、上古より、既に製作の方法傳はり、其後文化の發達に伴ひ、幾多の苦心經營を經、千變萬化の意匠を加味せり。日本にても、彼の東大寺正倉院御物中にも、亦既に最も優秀なる裝飾を施せるもの數箇これあり。彼の支那美術の黄金時代とも稱すべき唐朝に於ては、最も豊富なる意匠を加へ、且つ發達せし金工術を是に應用せり。唐朝は、新羅朝と同時に、新羅にて盛に唐の文化を輸入し、特に美術工藝は、最も之を歡迎し、其の製作物は、多くは唐式と稱するも、誣言にあらざるもの多し。日本も亦飛鳥、寧樂兩朝は、朝鮮を通じ、北魏及唐の文化を盛に輸入し、其後朝鮮との關係昔日の如くならざるに至りては、直接に唐と交通を開始し、朝廷にも、遣唐使の制を設けられたるが如き、如何に唐の文化を輸入せるに汲々たりしかを窺知し得べし。近頃鏡鑑の、古墳中より發掘せらるゝもの實に夥しく、支那六朝より、唐、宋、元、明等の製作に係る者、及び朝鮮固有の者、或は朝鮮にて以上の製作物を模造せるもの等あり。然れども各々趣致及手法を異にし、各々一長一短あり。斯の如き支那及朝鮮の各時代に於て製作せられたるものゝ中に就き、意匠手法共に最も優秀なるは本品たり。本品は、日本、支那、朝鮮を通じて、最も美術工藝の發達せし唐時代に於て製作せられたるものにして、近年開城附近の古墳より發掘せるものなり。本品に據り、同時代の豊富なる意匠並に精巧なる金工の一斑を窺知し得べし。本品も亦高麗古墳より發掘せざるが故に、假りに高麗の部に編入せり。



第一〇 女眞鏡

(徑五寸一分五厘
厚サ一分五厘)

女眞は、高麗の東北にて、現今の咸鏡道の東北境、及滿洲吉林黒龍二省の地たり。もと靺鞨の遺種にして、統一する所なく、黒水即ち現今の黒龍江附近に居住せるものを東女眞と云ひ、其西に居るものを西女眞と云ふ。高麗成宗の時より、或は使を遣し方物を献じ、或は邊境を侵せしことありしも、睿宗十年國號を改めて金と云ひ、皇帝と稱す。美術の系統より云はば、北魏よりして文化を繼續し、頗る旺盛なりしが如し。然れども其の遺品として傳世せるもの極めて稀にして、發達の程度果して如何なる程度なりしかを知るに由なし。只だ其の文字の意義を解する能はざるは、遺憾に堪へず。

堯禋

統幣昭炎絲祭

翠本祀祀祀祀

胡出祭 叔務燧

銓發羽 射翎化柱箭

出矣就就就就

炷祭

第一 高麗朝 梵鐘

(龍頭共高サ五尺七寸五分)
(口徑三尺一寸八分)

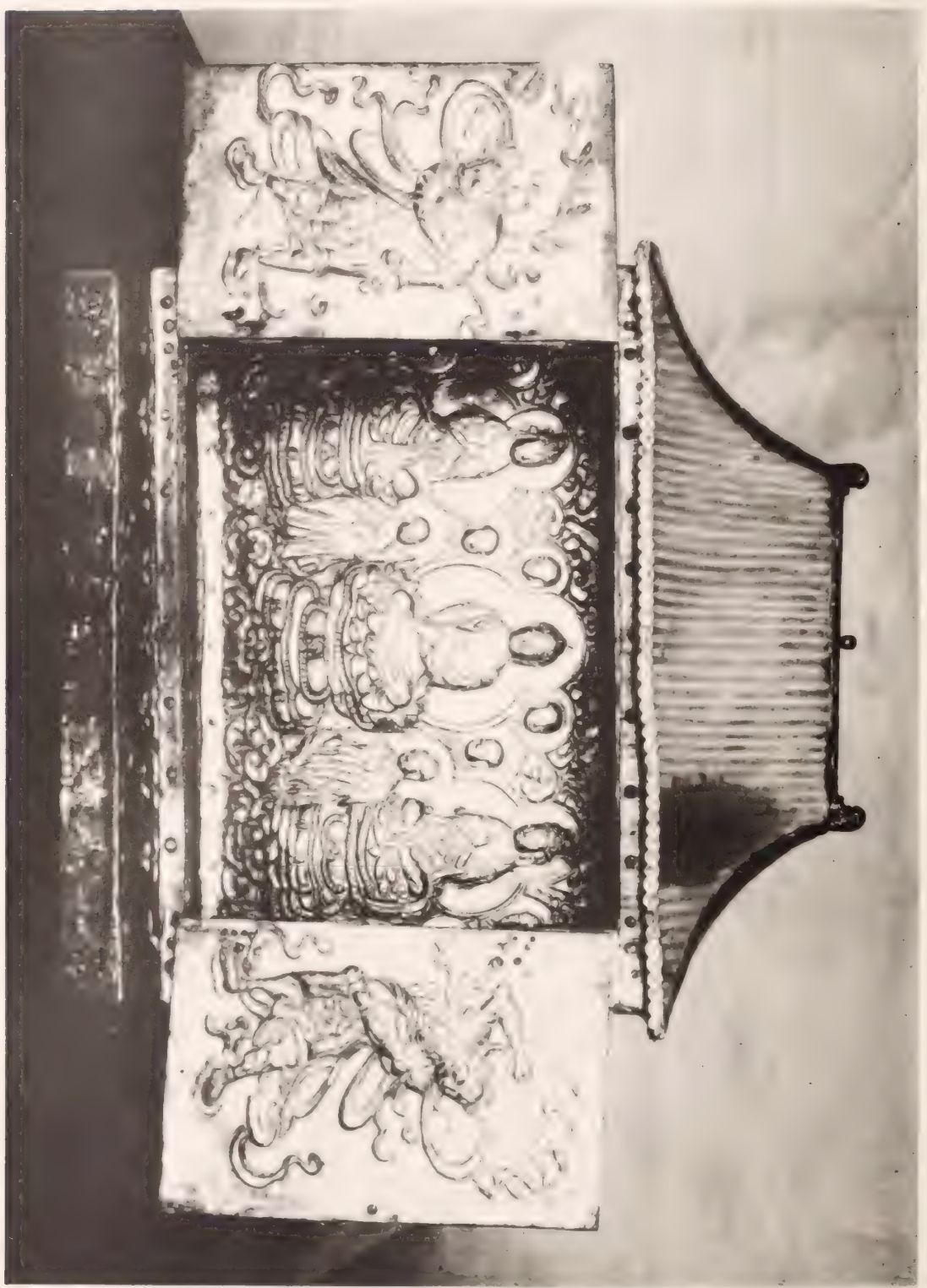
銘に曰く「聖居山天聖寺統和二十八年庚戌二月」とあり。統和は、梁の年號にして、今を距ること約七百八十年、即ち高麗仁宗朝の製作なり。鐘の中央部に、半肉彫刻にて天人雲上に奏樂せるの圖を顯はし、上部及下部に、寶相花紋を以て裝飾しあり。其の圖案は、彼の有名なる新羅朝の盛時に於て鑄造せられたる、慶州鐘閣の大鐘に同じ。本品は元京畿道慶州鐘閣にありしものなり。元來朝鮮にては、古代より鑄造の術行はれ、新羅朝にては、盛に巨大なるものを製作せり。同時代の製作に係る慶州鐘閣の大鐘の如き、以て同時代の技術の發達せるを窺知し得べきものあり。然れども現今朝鮮に存在せるものは優秀なるもの比較的僅少なり、所謂和寇或は壬辰の役等に於て、日本に拉去せられたるもの、亦少しとせず。本品は蓋し、其の製作年代及其の様式に於て、前記慶州鐘閣の大鐘に及ばざるは無論なるも、同一の意匠手法を以て製せられたるものにして、亦優物たるを失はず。



第二二 高麗朝 厨子 其一

（高サ九寸三分
長サ八寸二分
巾四寸二分）

高麗朝は、新羅に次ぎ佛法最も隆盛なりし時代にして、今猶精巧なる佛像佛器等の現存せるものあり。而して美術も亦、佛法に伴ひ旺盛なりしが如し。本品は、實に此時代の製作に係るものにして、全部青銅を以て製作し、内部は、第一圖に示すが如く、佛像を半肉彫刻に顯はし、之に鍍金を施せり。其の佛像の様式は、頗る優麗にして、確に同朝の特色を見るべく、其の手法は、最も精緻にして、美術の發達を窺ひ知るを得べし、外部は、第二圖の如く、同じく佛像の毛彫を施し、其の下部に、唐草を以て裝飾す。曲線の美は云ふ迄もなく、刀法の自在にして、精緻なる、蓋し同朝に於ける金工の發達を見るに足らん。



第一三 高麗朝 厨子 其二(裏面)

略解は前頁に掲出せり。



第一四 高麗朝 香爐

(高サ一尺五分
徑一尺一寸八分)

高麗朝は、新羅の繼續者として、其の初期に當りては、支那宋朝の感化を受け、後期は、主に元の文化を輸入し、文事頗る旺盛にして、且つ佛法大に行はれ、佛像及其附屬品等の技工は見るべきもの多し。同朝末期恭愍王は、熱心なる佛法の信者にして、數回大法會を行ひ、佛寺を創設し、又僧侶を度し、至らざる所なし、且つ自ら繪畫を能くし、美術嗜好者として、最も有名なり。本品は、同朝末期に都せる江華島の傳燈寺に傳はりたるものにして、近く同寺より博物館に献納せるものなり。本品に、至正二十六年丙午五月日眞宗寺香院の文字を刻しあり。至正二十六年は、即ち恭愍王即位十五年にして、前記の如く、佛法及美術隆興の時代たり。本品は、恰も此の時代に於て製作せられたり。眞宗寺とは、何れに在る寺院なるかを知らざるも、元同寺に傳はり、更に傳燈寺に移りたるものならん。本品の形狀は、圖の如く、普通寺院にて、佛前に使用せるものと異ならざるも、銀相嵌にて、圓形中に梵字を施し、且つ全體には、主に同朝の特色たる、所謂高麗唐草を以て裝飾せり。其の意匠の優美なる驚くべきものあり。特に最も珍とすべきは、高麗朝製作の美術品の、主に陶器を初として、古墳中より發掘せるものなるにも係らず、本品は、傳世なるが故に、數百年前の古色大に掬すべきものあり。



第一五 高麗朝 半鐘

(高サ九寸八分
徑五寸三分)

高麗朝は、新羅朝と異り、宋元の感化を受け、自ら高麗獨特の趣味を發揮し得たり。本品は、之を新羅朝に比し、其の意匠手法を異にし、所謂高麗趣味を見るべく、又支那宋元の製作に比し、更に異なるが如し。全體の形狀は勿論、龍頭及裝飾紋樣等も、亦頗る華麗なる點多く、即ち高麗朝獨特の趣味を味ふことを得べし。



第一六 高麗朝 大花瓶 (高サ一尺六寸一分)

所謂三島手なるものは、高麗陶器の一種にして、最も點茶人に愛玩せらる。其の製作品は、多くは茶碗、皿、井等の小品多し。然るに、本品は頗る壯大なるものにして、上部は、三島手の特色たる紋様、下部には、一種の唐草紋様を施しあり。而して其の中部には、最も雄健なる意匠の雲龍を以てす。本品は、慶尙北道安東郡鳳停寺に傳はりたるを、近く博物館の所有に歸せしものなり。蓋し所謂高麗燒三島手中の大作にして、決して、他に其の比類を見ず。



第一七 高麗朝 茶碗

(高サ二寸一分五厘
口徑四寸五分五厘)

高麗陶器中、所謂三島手なるもの、特に點茶人に愛玩せられたるは、果して何れの點なるか、本品を一見せしものは、忽ち他の説明を俟たずして、之を會得し得べけん。三島手にも亦、其の種類頗る多く、疎雜なるものなきにしもあらず。本品は其の最も上乘なるものなり。碗の内部に「長興庫」の文字あり、朝鮮にて長興庫なるものは、油、紙等を取扱ふ一つの官廳の名稱たり。此の三島手は、同官廳に於て、特に製作せしめたるものなるか否かは、未だ之を知らず。又近頃慶州長興庫の文字あるものあり。慶州にも亦同名の官廳ありしか、或は窯元の名稱なるかを詳にせず。要するに三島手なるものは、所謂高麗燒中最も趣味ある一種の製法なり。



第一八 高麗朝 白磁人物置物（高サ八寸 三分八厘）

所謂高麗燒は、其種類頗る多し、青磁、白磁、相嵌、及其他各種の釉藥を施せるものあり。形狀に於ては、瓶、缸、皿、盒等を始め、其他之を小別せば、殆ど枚舉に遑あらず。多數の物品中には、非常に精巧なるものあり、且つ一種崇高なる趣味の掬すべきものあり、後世の決して模倣し能はざる點あり。高麗朝は、美術旺盛にして、各般の製作物大に勃興せるも、其の中最も優秀なるものは、即ち陶磁器是なり。本品は高麗燒の一種にして、即ち所謂白高麗手にして、最も優れたる點は、形狀の巧妙なるにあり。近頃開城附近の古墳より發掘せるもの、實に其の數、萬を以て數ふべきも、形狀に於て本品の如き優秀なるものを見ず。蓋し所謂高麗燒中の珍品たり。



第一九 高麗朝 大缸

(高サ九寸八分五厘)

高麗陶器の精巧なるは云ふまでもなし、然れども、其の多くは小品なるものにして、本品の如き、形状の大なるものは稀に見る所、圖案は上部に菊花唐草を施し、中部の大部分に蓮花紋様を顯はし、共に白色黒色の相嵌たり。本品の使途に就いては確言し難きも、或は飲料を貯藏せしものならんか。要するに、これも亦所謂高麗焼中の逸品たるを失はず。



第二〇 高麗朝 酒煎子

(高サ一尺一寸三分五厘
短徑四寸七分五厘)

陶業家の釉藥中、最も難しとせるは、蓋し、青磁釉ならん。而して最も難んずる青磁釉に交ゆるに辰砂を以てす、青磁釉と辰砂と、火力の關係を、如何にして成功せしめしか、此の點に就て見るも、麗朝陶業の發達を知り得べし。其の圖案に就て云はゞ、葡萄を以て、紆餘曲折せる唐草紋様を描き、其の間に、配するに童子を以てす。唐草紋様の巧なるは云はずもがな、童子の意匠に至りては、實に奇想天外より來るの感あり。本品も亦、高麗發掘陶器、即ち所謂高麗燒中辰砂入のものとして、最も優秀なるものに屬す。



第二一 高麗朝 石棺

(縦一尺二寸
横一尺八寸五分)

朝鮮にては、石屬彫刻法比較的發達したりき、即ち新羅朝に於ける建築物としては、慶州金祐信石碑、又同地佛法寺なる白雲橋、青雲橋等の如き、驚くべき精巧なるものあり。又同寺に、無影塔〇〇塔等あり。佛像にては、同地の石窟菴石佛の如き、雄大にして、其の手法の後世模範とするに足ること既に述べたるが如し。其他各地に現存せる佛像、石塔、等枚舉するに遑あらず。降つて高麗朝にても、開城に恭愍王玄陵及王妃正陵の石屬彫刻物等あり。李朝にては、彼の有名なる京城バユタ公園にある廢〇〇寺大理石十三層塔の如き、東洋無比なるものあり。要するに何れの時代にても、石屬彫刻物の優秀なる製作品を出したりき。其發達の理由は、素より一にして足らずと雖も、朝鮮は由來石材の産出に富むてふの一事は、これが主因を爲すこと勿論の事なり。されど石屬彫刻品の一般朝鮮人の趣味に適合すること、並に佛法の關係等よりして、如斯發展を來せるものならん。本品は、高麗朝古墳より發掘せる石棺にして、果して何人の墳墓なりしかを知らずと雖も、要するに貴人の墳墓たりしことは、其の彫刻せるものゝ、頗る優秀なるよりしても容易に推測し得べし。本品は、圖に示すが如く、石棺の一部分にして、一枚石に龍を陽刻しあり。其の圖案は最も巧妙にして、且つ自ら高麗獨特の雅致あり、以て高麗朝に於ける石屬彫刻物の發達を窺知し得べし。石棺には、龍模様の外、鳳凰、梵字、唐草、蓮花、寶相花紋等を以て、圖案の材料とし、或は陽刻或は陰刻等種々なれども、其の手法の巧妙なる只管一驚を喫せずんばあるべからず。



第二二 高麗朝 刺繡

朝鮮にては、刺繡は、遠く新羅朝より行はれ、高麗にては、頗る發達せしものゝ如し。古來より朝鮮にては、支那との交通最も頻繁にして、新羅朝にては、主に唐の美術工藝を輸入し、高麗朝にては、主に元の文化を模範とせしものゝ如し。日本にては、刺繡は古く行はれたるは無論なれども、彼の一世の豪奢を擅にせし桃山時代に於けるものを見るに、未だ充分なる發達を見ず。其後元祿に至りて、頗る發達せしものゝ如し、本品は、高麗恭愍王の十年辛丑十二月、紅巾の亂を避け、福州に行幸す。當時戶長戶長は現今に於ける略大臣と同じ謁誠捍なるもの、王を助けて殊勳あり、王、之を賞賜す。其後慶尙北道安東太師廟に保管しありしを、今春末松博物館部長出張の途次、蒐集せられたるものなり。本品の圖案は、菊、牡丹、朝顔、寶相花等にて、地は日本の鹽瀬の如きものに、各種の色絲を以て、巧に刺繡しあり。日本にては、主として片面より見るべく刺繡せらるゝもの多きも、本品は、歐羅巴殊に伊國風の兩面刺繡たり、其の精巧、或は今人も三舍を避くべし。



第二三 李朝 姜希顔筆山水

(縱八寸
横一尺)

姜希顔は、李朝世宗朝凡五百年前の人にして、李朝に於ける第一流の大家たり。蓋し世に傳ふる作品頗る稀にして、充分に其の妙趣を知る能はざるは遺憾なり。本品も亦斷片にして、僅に其の一斑を窺知するに過ぎず。氏の畫法は李上佐と同じく、支那北宗を學び、殆ど馬遠、夏珪を凌駕せんとす。若し日本の畫家に就て之を索むれば、雪舟を除き、能く其の右に出づるものなからん、見よ、人物の如何に巧なるかを、橋下水流の如何に活躍せるかを。氏の小傳は左の如し。

字景愚、號仁齊、晉州人、碩德長子、世宗辛酉文科集賢殿直提學、詩書畫三絶、獨步一時、詩似韋劉、畫似柳郭、書兼王趙、有才有德、眞大人君子、丙子六臣之禍、辭連拷訊、不服、上問成三問曰、希顔與謀乎、三問曰、實不知、無盡殺名士、宜留此用之、實賢士也、由是免禍、丙子錄嘗過楊州樓院、詩曰、有山何處不爲廬、坐對青山試一居、簪笏九年成老大、莫教霜鬢賦歸歎、永川君定見而拜之、且批曰、此詩逼真、太甚、非徐卽李、蓋指居正承召也、定後過樓下、其下有書曰、此詩有江山雅趣、無一點塵態、天地之大、江山之奧、豈無人材而推徐李是何孤入才蔑人類、類之甚耶、定見之大悔、盡抹前批、潛谷集



第二四 李朝 安堅筆山水 (縦九寸 横七寸三分)

安堅は、世祖朝の人にして、今を距る四百五十年なり。字、可度玄洞と號す、山水、人物に巧なり。其の畫風は、頗る溫健なる趣致を帶び、厭ふ可きの霸氣なし。王蒙、李思訓、或は倪雲林の筆法を學びしには、あらざるか、要するに、氏も亦朝鮮に於ける第一流の大家たるを失はず。



第二五 李朝 韓修の書

(縦八寸一分
横一尺三分)

朝鮮は、古代より、絶えず支那の感化を受くこと多大にして、同じく文弱の弊に陥りしと云ふも不可なかるべし。故に上古に於ては、大陸殊に支那の文化を、我日本に輸入するの仲介となり、比較的に發達せしも、武力の點に於ては、常に我日本に畏服し、其の保護を仰ぎたること多し。其の後、日本との關係昔の如くならざるも、同じく文弱に陥り、武力は振はざりしものゝ如し。斯の如き國情なるが故に、文事に關しては、他に比し一頭角を抽んずるものあるが如し、即ち書に於ては、別掲の如く、新羅に僧金生あり、高麗に柳公權あり。李朝に韓石峯その人あり。石峯は、明宗朝凡四百四十年前の人なり。同朝に於ける第一流の書家にして、嘗て明宗敕を下し、千字文を書せしめ、之を習字の手本となさしめたることあり。其の書、奇に陥らず、自ら溫健なるが故に、後世書を學ぶもの、多く範を氏の筆法に採りたるも宜なりと云ふべし。要するに、實に明宗朝に於ける第一流の書家たるのみにあらず、李朝に於けるも、亦優に一流の書家たるを失はず。略傳左の如し。

韓修字永叔號石峯清州人薦授持平出仕入侍時上問學問之要修不能明卞以答人多笑之李珂白上曰善人有多般疵累有學問兼修者有行潔而學不足者若韓修是行潔而學不足者也不可以一言不稱旨輕視善士也

經筵日記

竹門斜握水回看
盡歸雲看勢來多
病不應妨望興華吟
曾是禮秋僊
又贈西都令行

第二六 李朝 李上佐筆山水 (縦五寸五分
横五寸)

李上佐は、字公祐、成宗朝(四百四十年前)の人にして、李朝に於ける、能手として、姜仁齊と、並稱せらる。其の畫は彼の馬遠、夏珪の遺風を帶び、筆力の雄健なる、仁齊の外に其類を見ず。本品は、尺に満たざる小品なれども、畫趣津津、掬すべきものありて存す。



第二七 李朝 李容齊筆雲龍（縦八寸 横六寸五分）

李容齊、石敬は其の號なり。李朝成宗朝の人、今を距ること、凡四百四十年なり。石敬の傳は、未だ之を詳にせずと雖も、畫名頗る高く、就中墨竹を善くせりと云ふ。今本圖を見るに、筆力頗る雄健にして、位置宜しきを得、龍に配するに、黒雲と波濤とを以てす。龍の飛登せるの情勢、朝鮮畫としては、其の技凡ならず、蓋し亦能畫たるを失はざるべし。



第二八 李朝 申潛筆花鳥

(縦三尺七寸
横一尺五寸三分)

申潛、字元亮、靈川子と號す。李朝中宗朝の人にして、今を距る凡四百年なり。申潛の傳に曰く、文章を能くし、書畫亦巧みにして、殊に葡萄を描くに妙を得、世に詩文書畫の四絶を以て名ありと云ふ。申潛の畫は、普通朝鮮人の描く所と趣致を異にし、筆力頗る雄健にして、着色濃厚なり。而して所謂朝鮮固有の厭ふべき霸氣少く、之を日本の畫家に比すれば、恰も狩野元信に酷似せり。兩者共に其の生世時代に於ても大差なく、又畫風に於ても、日本朝鮮を通じ、同様の趣味に發達せしは奇と謂ふべし。



第二九 李慶胤筆 高士觀月

鶴林正字季吉、駱坡と號す。李朝明宗朝の人にして皇族たり、今を距ること凡三百七十年なり。鶴林正の筆と稱するもの數多あれども、多くは眞筆にあらざるもの多し。本圖は長松樹下の高士、仰いで月を觀るの圖にして、前に清泉を配し、遠く高山を描く、其の筆致の健勁なるは云ふまでもなく、一種崇高の趣味の掬すべきものあり。圖中の高士は、筆者鶴林正の理想的人物なるか。筆者は皇族にして、且つ文筆を以て有名なる貴公子たるが故に、畫も亦自ら普通一般丹青家の企て及ばざる點あり。是の畫に就て想ふに、東洋殊に南派の畫は、其價值の存する所、主に筆にあらずして、氣韻にあるものゝ如し。



第三〇 李朝 李禎筆山水（縱六寸 横八寸）

李禎、字公幹、懶齊は其の號なり。李朝明宗朝の人にて、今を距る凡三百七十年なり。氏は、本朝に於ける大家李上佐の子なるが故に、畫傳は父より之を繼紹せるものと見るは當然なるも、其の畫は、父李上佐と異なる點多し。李上佐は支那北派を學び、其の長ずるところ、筆力の雄健なるにあり。懶齊は然らず、本圖を見るに、支那北派と云はんよりは、寧ろ南派に屬すべきものにして、筆としては、父李上佐に及ばざる遠きも、一種掬すべき撥刺たる意匠のあるを認め得べし。所謂氣韻を以て優るものと稱すべきか。



第三一 美人彈琴（縦七寸 横六寸）

本圖は其の筆者を詳にせざれども、老松の下、美人榻上に在つて琴を弾じ、傍に侍女、卷を捧持せり。老松を描くに、頗る雄健なる筆力を以てし、美人を寫すに、纖巧なる皴法を用ゆ、而して着色も、亦頗る宜しきを得たり。之を支那畫家に比すれば、九英、劉少年に比肩すべきか。斯の如き名家の、其名を逸せるは、頗る遺憾とする所なり。



第三二 李朝 月潭筆 山水

(縦七寸 横七寸五分)

月潭は、明宗朝(三百七十年前)の人なり。未だ其の來歴を詳にせざれども、描く所の繪畫は、恰も足利の末葉に於けるものに酷似せり。而も其の筆力、雄健にして、頗る雅趣に富めるは、蓋し朝鮮畫家中の白眉たり。



第三三 李朝 申夫人筆 蘆雁

(縦七寸
横五寸)

申夫人は、明宗朝三百六十餘年前の人、思妊堂と稱す。平山の人にして、進士命和の女、大儒李栗谷の母たり。詩文を能くし、其の集あり。又繪事に巧なり。本圖は、小品なれども、其の筆法、極めて精緻なるは、婦人の筆として、特色を見るを得べく、且つ位置の整然として宜しきを得たるは、李朝に於ける幾多有髯畫家も亦、未だ能く是れに及ぶものあるを見ず。蓋し、李朝女流中第一の能筆たるを失はず。大儒栗谷の母にして、斯の如き藝術に長ぜるものあり。其の家庭の如何に高雅なりしかを思はしむ。夫人の傳に據れば、天資溫雅、志操貞潔云々とあり。傳ふる所の思親の詩あり、曰く、

慈親鶴髮在臨瀛 回首北村時一望

身向長安獨去情 白雲飛下暮山青

今是の詩を讀むも、千古の下、其の人を偲ばしむるに足る。壽四十八にて歿せりと云ふ。



第三四 李朝 申夫人筆 蘆雁 (縦七寸 横九寸)

申夫人の筆は、前掲も亦蘆雁にして、本圖と同じ。同時に同圖、然も同人の繪畫を掲ぐるは、却て其の比較に便せんが爲めなり。



第三五 李朝 仁獻王后御繡山水(縦五尺三寸五分
横一尺五寸)

本圖は、一幅の山水、而も頗る密畫たり。然れど筆を以て描けるにあらず、數百種の色絲を以て、悉く刺繡せしものたり。其の刺繡の巧妙なる、驚くに堪へたり。傳ふる所に據れば、李朝仁獻王后の御繡にして、其の下畫は、仁檐王后の御筆に係り、書は肅宗王の御筆たりと云ふ。由來本品は、王室に傳はりたるが、其後某臣に賜はりたるもの、轉々して民間某兩班の所藏となりしものを、博物館に蒐集せられたるものなり。



第三六 李朝 李崇孝筆 漁夫

(縦六寸五分
横四寸三分)

李崇孝なるものは、果して何れの時代の人にして、如何なる來歴を有するかを詳にせず。然れども本圖を見るに、文人の餘技に、畫筆を弄せるものゝ如し。筆力は、殆ど畫法と同じく、其の形態は、畫家として賞讃すべきにあらざれども、亦自ら氣韻の生動せるを見るべく、思ふに筆の人にあらずして、氣韻の人なるか。市井の氣風なく、自ら畫裏の人物と共に、高風霽月の趣致あるを認む。



第三十七 李朝 趙涑筆 鷄林古事 (縱三尺五寸 横一尺九寸)

趙涑は、李朝仁祖朝の人にして、今を距る凡二百九十年なり。字は景溫、滄江又醉翁と號す。氏は元來文官たり。固より繪畫を以て門戸を構へたるものにあらず、然るに本圖は、極密なる金壁青錄山水にして、其の手腕は、繪事を以て専門とせる凡筆の及ぶ所にあらず、或は同氏の筆にあらざるかを疑ふ。蓋し朝鮮にては、古來より繪事を以て専門と爲すもの比較的少數にして、何れも大官若くは文人の餘技に弄ぶもの多く、所謂藝に遊ぶものなり。されど大官文人にして、趙仁齊、李上佐の如き古今の大家あり。趙涑は、或は其の亞流なるか。果して然らば、眞に敬服の外なし。本圖は例の鷄林古事にして、圖中樹上に金櫃を懸け、白鷄の下に鳴くあり。即ち新羅始祖の古事にして、朝鮮の歴史を一讀せるものは、何人も知悉せるが故に、茲に贅せず。書上左の題款あり。

御製

此新羅敬須王金傳始祖、金櫃中得、仍姓金氏者、金櫃掛于樹上、其下白鷄鳴、故見而取來、金櫃中有男子、繼昔氏爲新羅君也、其孫敬須王入高麗、嘉其來、須諡敬須、

歲乙亥翌年春命圖見三國史

吏曹判書臣金益熙奉敬書

堂 令臣趙涑奉敬繕繪

云々とあり、是に據つて見るときは、勅命を奉じて書きしものゝ如し。



第三八 李朝 洪得龜筆漁翁

(縦五寸三分
横四寸二分)

洪得龜、字子徵、蒼谷と號す。李朝孝宗朝の人にして、今を距ること二百六十年たり。氏の傳を詳にせずと雖も、思ふに同朝に於ける兩班の一人にして、所謂文人の餘技に、畫筆を弄せしものゝ如し。其の描く所は、畫家の畫にあらず。即ち文人畫たり。故に畫家の描く所のものに比し、入格せざる點なきにあらずれども、一種獨特の崇高なる風致あり。即ち漁翁の石に倚り、長竿を垂れ、悠々自適せるの狀、寫し得て其の妙を得たり。由來東洋殊に南畫は、其の形にあらずして、其の精神の如何にあり。此の點より論ずるときは、豈に凡畫工の企て及ぶ所ならんや。



第三九 李朝 曹世傑筆仙人圍棋

(縦九寸二分
横一尺二寸)

曹世傑、涇江と號す。李朝孝宗朝の人、今を距る凡二百六十年たり。本圖の外、博物館に、同じ仙人を描きしもの數葉あり。何れも極めて纖巧なる筆にして、且つ施すに鮮麗なる顔料を以てせり。由來朝鮮畫は、一種の霸氣を藏せると共に、畫圖鮮麗を缺くは殆ど通弊たり。然るに本圖を見るに、明末若くは清の初期に於ける繪畫の如く、頗る鮮麗なるは奇とすべし。且つ描く所の仙人も、亦比較的骨格宜しきを得、後素の術に乏しからず、或は思ふ、支那の畫家に就き、其の筆法を傳へ、且つ着色等の法を學びしにあらざるか。



第四〇 李朝 金埴筆 蘆雁 (縱六寸 横四寸五分)

金埴字仲厚、竹西と號す。李朝顯宗時代の人にして、今を距ること凡二百五十年たり。李朝に、金埴と稱する同名なる畫家あり。竹西は、其の描く所、形體に重きを置かず、氣韻を以て優るものと稱すべきか。竹西好んで牛を描き、其の筆蹟傳ふるものあり。是等は、一種特獨の繪畫にして、敢て形體に係らざるもの多し。本圖は、彼の畫牛に比し、比較的形體の點に於ても、亦た竹西として當を得たるものと稱すべし。蓋し所謂文人の餘技に就るものとして見るべきか。



第四一 李朝 尹斗緒筆漁樵問答

(縦三尺二寸
横四尺五寸五分)

尹斗緒、字孝彦、恭齊と號す。李朝肅宗朝の人、今を距る凡二百四十年たり。恭齊は、同時代に於ける大家にして、描く所、山水、人物、花鳥等あり。同時の朝鮮畫家としては、頗る筆力健勁にして、且つ畫趣に富む。本圖の如きも、人物畫として大に賞賛すべきにはあらざれども、比較的骨格正しく、略々成效に近きものと謂つべし。只惜むらくは、同時代に於ける朝鮮の畫壇を風靡せる、一種の霸氣を脱する能はず、否な寧ろ朝鮮霸氣を遺憾なく發揮せしものと云ふべきか。其の畫の趣味津々たるは多とすべきも、畫品の點に就ては、遺憾の點なきにあらず。





第四二 李朝 崔北筆 山水

(縦七寸五分
横一尺二寸)

崔北は、李朝英宗朝の人にして、今を距ること凡百八十年なり。字七々、毫生館、又三奇齋と號す。氏は元來所謂兩班の家に生れたるにあらず。別傳の如く、殆ど其の族系だに詳ならず。然れども其の性頗る磊落にして世情に關せず、最も酒を嗜み、常に一瓢酒を得れば、是れ足れりとせしものゝ如し。描く所の畫も、亦自ら其の氣風を顯はし、市井の厭ふべき霸氣なきは、朝鮮畫としては稀に見る所たり。蓋し決して只だ天品にのみ依頼して、研磨せざるにあらず。大に研讃を積めるものゝ如く、畫は普通文人の餘技に成れるが如き、拙劣なるものにあらず。小品たりと雖も、畫法頗る嚴峻にして、其の性の磊々落落たるに似ず、六法自ら具はれり。宜なるかな、終に圖畫署畫員に列せられたるや。氏の素行は、左の傳に詳なり。

字七七世不知其族系、破名爲字行于時、工畫、眇一目、嘗帶眼鏡臨帖、摸本嗜酒、善出遊、入九龍淵、劇醉或笑或哭、又叫呼曰、天下名人崔北、當死於天下、名山遂翻身躍入、有救者得不死、七七飲酒常一日五六升、市中酒保携壺至七七、輒傾飲、家貲益困、客遊不壤、及東萊二府人持綾絹踵門者、相續人有求爲山水畫、山不畫水人怪詰之、七七擲筆起曰、唉、紙以外皆水也、畫得意而得錢、小則七七輒怒、罵裂其幅、不留或不得意而過輸其直、則呵呵笑、拳其人還其錢、出門復招而笑、彼賢子不知價、自號毫生子、七七性亢傲、不循人與、西平公子圍棋賭百金、七七方勝而西平請易一子、七七遂散黑白、歛手坐曰、棋本於戲、若易不已、則終歲不能了一局矣、後不復與西平棋、嘗至貴人家、闖者嫌舉姓名、入告崔直長、至七七怒曰、胡不稱政丞而稱直長、闖者曰、何時爲政丞、七七曰、吾何時爲直長耶、若欲借啣而顯稱、我則豈可捨政丞而稱長乎、不見貴人而歸、七七書傳於世人、稱崔山水、金陵南公轍因李宜佃識崔七七於山房、七七言曰、國家置水軍幾萬人、將以備倭倭固習水戰而我俗不習水戰、倭至而我不應、則彼自淪死爾、何苦于三南之赤子騷擾爲也、復取酒打話、至曙世以七七爲酒客爲畫吏甚者、以狂生然其言有理、多譏諷、李宜佃言七七好讀書、死於京邸、不記其年壽、幾何、金陵集



第四三 李朝 金弘道筆鬪犬

(縦二尺四寸五分
横一尺三寸)

金弘道、字士能、檀園は其の號なり。正祖朝百四十餘年前の
人にして、王室畫員たり。山水、人物、花卉、翎毛等、悉く描かざ
るものなし。其の筆力の自在なる、李朝畫家中、錚々たるも
のなり。本圖は、例のブルドックにして、其の畫法も亦平素描
く所と異なる。或は歐洲畫風を模倣せるものなるか。蓋し
檀園の筆としては、頗る珍奇にして、而も傑作たり。



第四四 李朝 李寅文筆山水（縦一尺四寸六分）

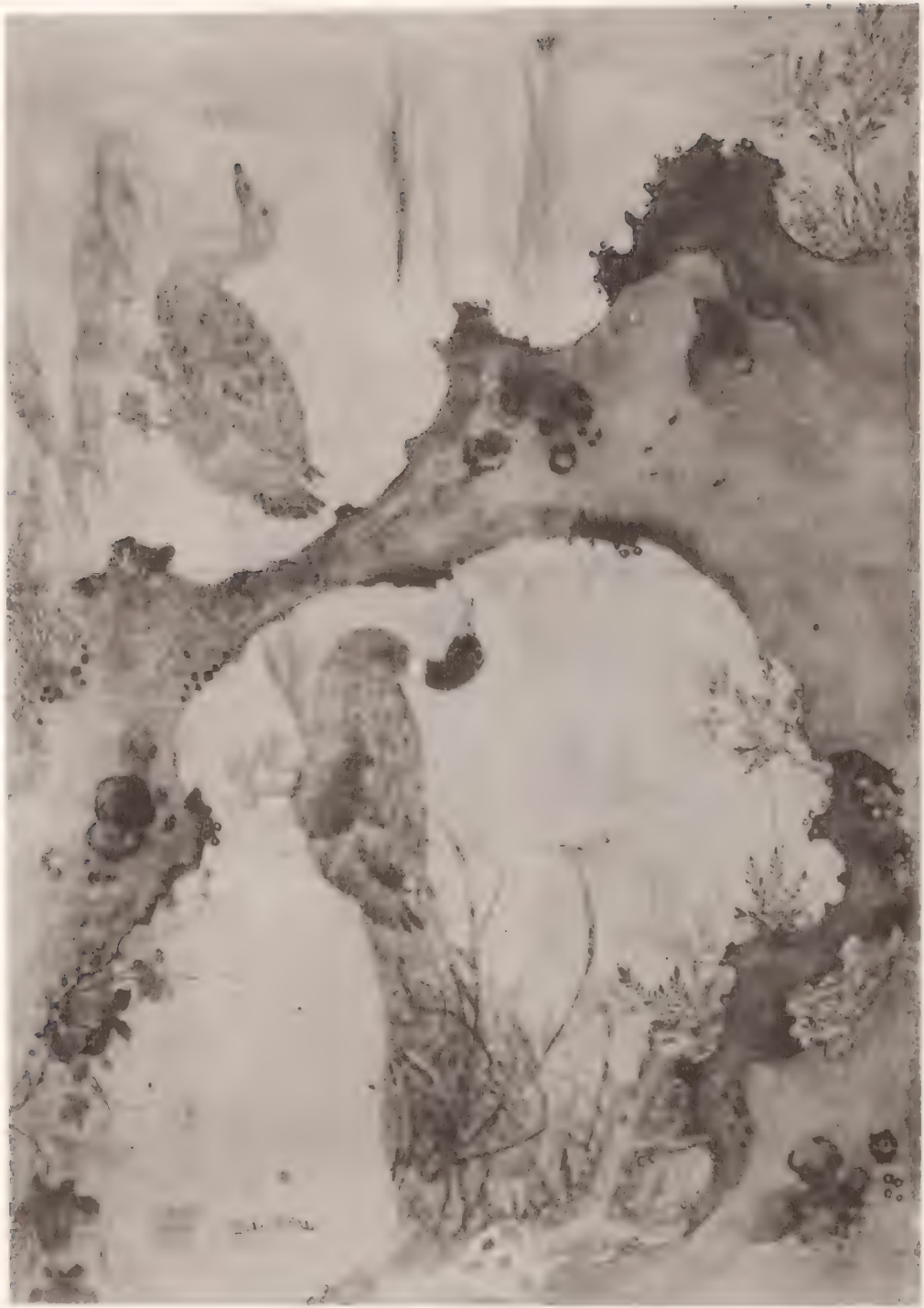
李寅文、字文郁、有香と號し、又古松流水館道人と稱す。純祖朝の人にして、今を距る約百十餘年たり。本圖は、十數尺に餘る大畫卷にして、其構圖の巧なる、人をして歎賞措く能はざらしむ。氏の筆は、敢て雄健なりと稱するにあらずれども、繪事に就き、頗る練磨を経しものにて、文人の餘技に描きしものと、自ら其の撰を異にせり。朝鮮にて、百年前後にも、亦斯の如き能筆家のありしことを知るべし。



第四五 李朝 金厚臣筆秋渚水禽（縦二尺五寸
横一尺五寸）

金厚臣、彝齋と號す。李朝純祖朝の人、今を距る百餘年たり。彝齋の傳は未だ之を詳にせず、且つ朝鮮に於て大家として名あるにあらざれども、本圖は、其意匠頗る奇拔にして、水禽の秋渚に遊ぶの狀、眞に逼り、頗る寫生的なるは、他の朝鮮畫の非寫生的なるにも係らず、喜ぶべき點たり。要するに、畫風の朝鮮趣味たるよりは、寧ろ支那趣味たるに近し。或は清國に漫遊し、繪畫を學びしにあらざるか。且つ朝鮮普通の、文筆の餘技に就る繪畫に似ず、頗る練磨を経たるが如し。其の詳傳を逸せるは恨事なり。







第四六 李朝 申潤福筆 婦女彈琴

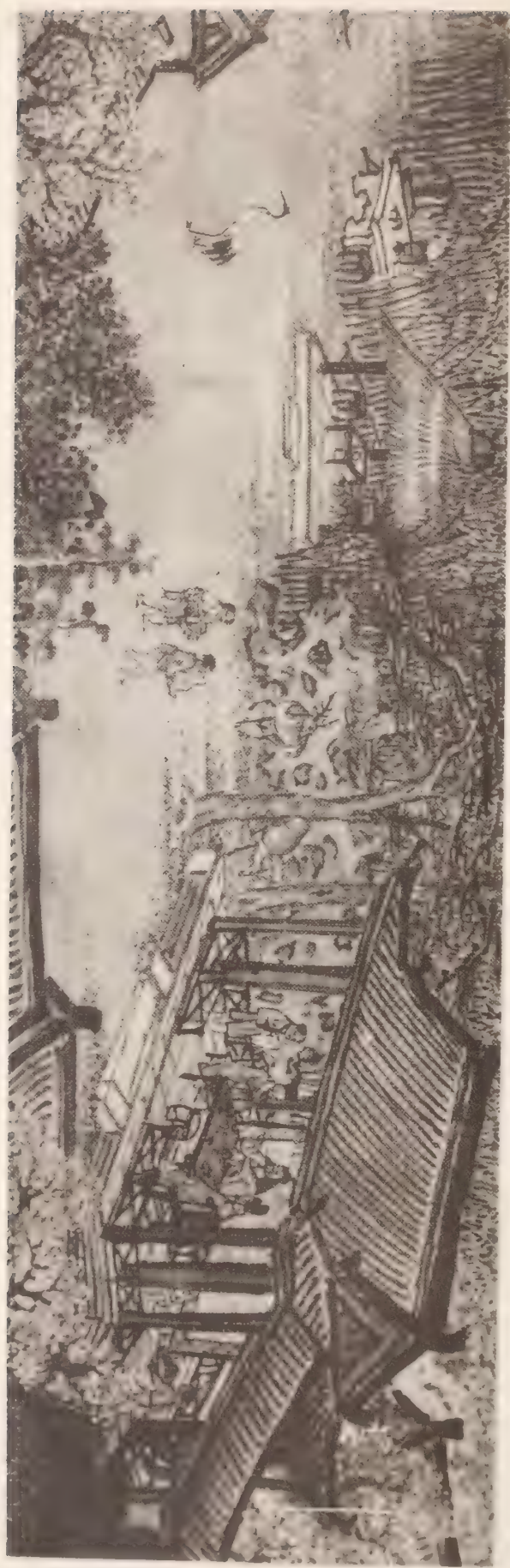
(縦八寸
横七寸)

申潤福、字笠父、蕙園は其號なり。李朝純宗朝の人にして、今を距ること未だ百餘年を出でず。固より大家と稱するに足らざれども、其の描く所、當時の風俗畫にして、本圖も亦其の一なり。由來朝鮮にて繪畫を能くするものは、専門的人僅少にして、多くは文武官及儒者等の餘技多きが故に、山水花卉等のもの多く、人物畫殊に風俗畫に至りては、頗る稀なり。只僅に蕙園を除きて檀園あるのみ。然れども檀園は、専門的に風俗畫を描きしにあらず。専ら山水、花卉、羽毛等、筆に任せて描き、偶々風俗畫を描きしに過ぎず。蕙園は然らずして、重に風俗畫を描き、最も見るべきものあり。故に之を掲ぐることにせり。



第四七 李朝 金斗梁筆山水（縦二寸二分）

金斗梁、南里は其の號たり。本圖は幅二寸一分を出でざる小卷なれども、描く所は千山萬壑、殆ど盡くる所を知らず。其の變化、驚くべきものあり。畫の趣味より推考するに、李朝中世に於ける畫風を帶び、其の大部分は支那南派に似たるものあり。或は支那に遊び、畫法を傳へしにあらざるか。詳傳を得ざるが故に、之を確むる能はざるは遺憾なり。然れども朝鮮に於ける、李朝以來の畫家として、大家たるを失はず。



第四八 李朝 眞珠添綴團扇

(總長サ一尺六寸六分
經八寸一分五厘)

本品は、元朝鮮帝室所有のものにて、度支部に保管しありしを、更に博物館に引繼がれたるものなり。朝鮮に於ける婚禮儀式用に用ゐられたるものにして、其の金屬製作の精巧なるは、云ふ迄もなし。眞珠寶石等、二百數十個を添綴しあり。果して何れの時代に於て製作せられたるかを知らざるに由なきも、極めて奢侈なるものなり。或は曰く、豊公の所持せしものと略同一なりと。然れども果して然るか否かを知らず。もし豊公の所持せりと稱するものにして、朝鮮より贈りたるものなりとせば、其れと同一なるは、當然の事に屬す。



第四九 李朝 眞珠添綴囊 (縦三寸五分
横五寸七分)

本品は、眞珠添綴囊團扇と共に、度支部より博物館に引繼がれたるものなり。同じく結婚儀式用に、之れを佩用せるものなり。地資は、鹽瀬の如き緋色織物にして、花紋を色絲にて刺繡し、更に之れに、眞珠二百數十個を添綴しあり。



第五〇 李朝 鐘

(高一尺五寸
中央周圍四尺二寸三分)

本品は、揭金剛山楡岾寺に傳はりたる銅製大香爐と共に、同寺より博物館に、獻納せるものたり。其の特に記すべきは、模様の優秀にして、手法の精巧なる點にあり。本品も亦、何れの時代及び何人の手に據つて製作せられたるかを詳にせざれども、上記するが如く、模様の優秀、手法の精巧なるに就て推考すれば、支那明時代の感化を受けて、製作せしものにあらざるか。要するに、本品の如き優麗なるものは、多く他に比類を見ず。



明治四十四年六月十五日印刷
明治四十四年六月二十日發行

朝鮮國寶大觀全壹冊

正價金三圓五十錢

著者 杉原定吉

發行者 朝鮮京城本町貳丁目
森山美

印刷所 東京市神田區佐久間町一丁目一番地
金屬版印刷合資會社

印刷者 東京市神田區佐久間町二丁目一番地
七條愷

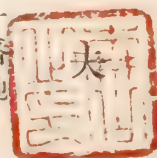
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社 秀英舍第一工場

不許複製製

發行所

朝鮮京城本町貳丁目
電話番號 壹四五番
振替貯金口座京城 一一五番

日韓書房



維新志士遺芳帖

曩日國民新聞社主催の維新志士遺墨展覽會は空前の快舉として天下の耳目を聳動し一世の人心に深甚なる印象を與へたるのみならず事天聽に達して畏くも侍從を御差遣あり更に皇太子殿下は親しく會場に行啓あらせられ尙ほ閑院宮、久邇宮、北白川宮、朝香宮、東久邇宮各殿下の臺臨を忝うするに至れり其の開會中は朝野の名流悉く駕を枉げ觀覽者日に万を以て數ふるの盛況を呈したりき本書は同展覽會に出陳

大判美裝全二冊帙入

上製金拾貳圓 郵稅四十二錢

特製金拾五圓 郵稅四十二錢

殘部僅少、再版不可能、

賣切後絶版、御中込本

日即時の事

せられたる志士遺墨のうち特に門外不出の珍金匱石室の秘たる萬金不換品四百十七點を擇びコロタイプ寫眞

金屬版を以て秋毛達はず之を縮刷し小傳及び解説二百頁を添へ最も富麗高雅の裝釘を施したるもの勤王憂國の精神と獻身犠牲の思想との最高潮に達したる維新前後の志士の熱血は悉く結晶して此の裡に在り其の與ふる教訓の大にして深く且つ永き之を展ぶれば懦夫も立つべく眞に是れ活きたる精神教育にして生命ある國民讀本たり

本書發行當時の國民新聞評

◎出版界の偉觀(國民新聞)
維新志士遺方帖現る

時は秋に入つて出版界未曾有の偉觀は現出せられたり本年一月上野公園に開催して未曾有の盛況と満天下の賞讃を博したる維新志士遺墨展覽會の好紀念『維新志士遺芳帖』は今や出版界在來のレコードを破れる盛裝と美裝とを以て現れ來れり此れを机上に横ふれば古代更紗の美帙に包まれし約三寸上下二冊の大冊にて帙を開けば芭蕉布の表紙の清雅先づ目を驚かす内容に諸卿七卿以下當時陳列せざりし珍奇墨をも併せて凡て四百餘點一頁毎に簡潔なる小傳を附し更に自詠の詩歌を挾む遺墨は短冊たり半紙たるに論なく文たり詩たり繪畫たるに論なく濃墨の良悉く活くるが如く或は墨痕未だ乾かざるかを疑はしむる者あり何分開場當時は廣き場所とて後者を觀つゝ已に前者の印象を忘るゝ如きものありしが此れは千變萬化の墨蹟を一帙に收めたるべき油然として胸裏に湧き其盛興の慷慨熱烈の氣と共に雲泥の差のみならず殊に編者の苦心の跡は其配列の順序用紙印刷裝釘の末にも悉く現はれ蝕める一二文字を讀まんが爲めに虫眼鏡を用ひて二三日を費せりと云ふが如き苦悶は其の苦悶の如き一見して何人も首肯する處なるものは其の精神の如き廉價を以て販賣せんとする書肆の獻身的精神は之を實見したる人は何人も恍然として其の美に酔ひて又其の無限なる内容の價值に驚嘆せざるもの無かるべし此書は幸に多少の殘部ある由なれば教育品としても美術品としても裝飾品としても此の天下再び見るべからざる珍書奇籍を一日も早く購ひ置かば千金萬金の奇什珍器を購ふに遙かに勝るものあり

電話替口
本座
東京
局
三四七
三五七

同文館

東京市神田區
神保町

Asian Collection
Herold B. Lee Library
Brigham Young University
Provo, Utah 84602

ASIAN
COLLECTION
JAPANESE
N
7362
.S93x
1911



京城

日韓書房

發行